



No.107 2010. 4. 1 発行  
 大阪大谷大学博物館  
 富田林市錦織北3丁目11-1  
 ☎(0721)24-1039

平成22年度・春・季・特・別・展

## 吉永邦治展

### 飛天・シルクロードの旅

KUNIHARU YOSHINAGA EXHIBITION

2010年4月3日(土)～7月2日(金)

平成22年度春季特別展として、吉永邦治先生による「飛天・シルクロードの旅」を開催します。

吉永先生は、シルクロードが現在ほど注目される遙か前から、中近東からアジア各地に旅をして、悠久の大地、自然に生きる民族や風物を描き続けておられます。また、仏教の東漸と共に、姿やかたちを変えた、数え切れない飛天たちが飛翔するシルクロード各地の仏教遺跡を訪れ、研究も重ねてこられました。

今展は、巾広い創作活動の中より、色彩豊かでスケールの大きな油彩、迫力あるデッサン、感性豊かに表された墨彩、遊び心で絵付けされた陶器・陶板、真珠のように光る七宝飛天などの作品群です。展示作品を通じて、吉永邦治独自の世界観、東洋の心を感じていただければ幸いです。



「満月」120S 油彩

## 天空へのいざない

### ～遙かなる飛天への旅～

子供の頃から世界地図に興味をもち、地球儀でよくあそんでいた記憶がある。その頃は、東シナ海の内海の町（薩摩川内市）に住んでいたため、東京よりも中国大陸に近いように思っていた。少年時代も、いつかはヨーロッパに行ってみたくと、度々地図を広げてみていたが、東シナ海を渡って中国から中央アジアを通り、イスタンブールを経れば、ヨーロッパに行けるであろうと思っていた。後年、このシルクロードに魅せられ、何回も旅することになるとは夢にも思っていなかった。

さて、私の心をとらえて離さない飛天に導かれた世界は、若き日、ヨーロッパに旅立った日から始まる。その帰路、私は中近東からインドに立ち寄り、西洋とは違う世界に触れたのがきっかけで、後に、高野山に登り、5年あまりのあいだ修行僧のような生活をしながら山上の大学で密教や仏教芸術を学んだ。弘法大師空海によってもたらされた曼荼羅などを研究するうちに、その図像のなかに、天空を背景に瑞雲たなびき、天衣を翻して美しく描かれた飛天に出会い、その秘められた宇宙観にひかれていった。大学時代から、飛天をもとめてアジア各地への旅を続けるうち、私自身のなかにアジアの民の心が大きくふくらんでいった。

古来、日本の人びとは、金色に輝く仏像と、仏を讃嘆している飛天の姿に、人智を超越した仏国土があることを知り、その香りや音色をもった飛天、樂天を三重塔の塔婆、寺院の灌頂幡などに刻みこんでいった。奈良、法隆寺金堂壁画などの流麗な美しい姿で描かれた飛天をみると、当時の画家たちは、靈芝雲には、生氣あふれる生命を、天衣には、光輝く太陽光線を、童子形の飛天には、再生をイメージし、不死や長寿、多



「風花飛天」80S 油彩

産を形象化していったように思われる。日本各地においては、経典や説話集や物語のなかに飛天が脈々と現在まで伝えられているが、よく知られたもののひとつに「三保松原」の説話がある。



「西の風 東の風イスタンブール」800×2600 黒彩



「彼方へ」800×2600 黒彩

そもそも飛天は、インドでは、ガンダルヴァと呼ばれ、八部衆のひとつであるインドラ（帝釈天）につきしたが、天空にあって奉仕している半神である。八部衆は、仏教においては、釈迦の教理を守護し、仏教の精神を底の部分から支える存在である。インドの飛天の姿は、はじめは、単独の男性のような姿であるが、後には、天人、天女が寄り添ったミトゥナ形式、すなわちガンダルヴァと配偶者である精霊アプサラスの飛天一对として表わされている。また、ガンダルヴァと同属である小さな翼と長い尾羽で飛翔し、半人半鳥の姿で樂を奏するキンナラもみられる。

やがて仏教が東に伝播するとともに、飛天もさまざまな姿やかたちが融合し生まれ変わってシルクロードから中国辺境地へ伝えられていくのである。

パーミヤン遺跡が世界遺産に登録されたというニュースは、記憶に新しいが、私が訪れた1977年頃の、アフガニスタンの印象は、インドやベルシャ、ローマ、ギリシャの文明が流入し、東西が結ばれ、文明の十字路にふさわしい古の雰囲気と満々とした美しい国であった。パーミヤン渓谷の景観も、ポプラの並木が風になびき、コスモスが咲き乱れ、澄んだ空気の中、ロバの鳴き声がこだまするのんびりとした情景があった。

高さ100メートルの断崖に多くの石窟が掘られ、その中には、塑像や美しい壁画が残されていた。その一角、東側に35メートル、西側に55メートルという奈良・東大寺の大仏をはるかにこえる巨大な大仏が堂々と静かに佇んでいた。この西側の磨崖仏の天井部分に、異なった文化の残影が色濃く反映された天人一体と天人二体からなる飛天がみられた。この飛天は、この地域特有のものであるが、2001年3月、タリバン政権によっ

「パーミヤン風景 (アフガニスタン)」  
1410×3860 デッサン

て東側の大仏の天井に描かれていた太陽神スーリヤとキンナラとともに同時にすべて粉々に爆破されてしまった。パーミヤンは、中央アジアや中国辺境地域の風土のなかで、飛天が伝播し展開していく軌跡をみるうえで、非常に重要であっただけに残念でならない。

東西両洋の文物が行き交うシルクロード各地には、異民族による多様な文化の花が咲いている。タクラマカン砂漠の西域北路のオアシス都市クチャのキジル石窟やミーランの遺跡では、ギリシャ・ローマ風の天使など翼や天衣とを併せ持つ過渡期の飛天もみられる。

1987年、世界の文化遺産に登録された敦煌の莫高窟には、270窟あまりに4500体もの飛天が、五弦琵琶などの楽器をもち、立体感をもたせ描かれていて、鶴、龍に乗った神仙、風神、雷神などとともに翔舞している。なかには、ひとつの窟に150体もの飛天がみられる。

「莫高窟を望む (敦煌・シルクロード)」  
1410×2740 デッサン

中国大陸に近づくにつれ、飛天（香音神）は、神仙、仙人の姿やかたちと重合し、雲に乗って流れるような天衣をまとった細身の飛天が、薫り豊かに飛翔するようになる。大きなうねりをもった飛天の流れは、大陸から直接、また一方、朝鮮半島を経て日本へ翻転してきた。

このような悠久の時のなかにいる、たおやかで優雅な飛天との出会いは、私にとって運命的であるが、これからも魂の心のふるさとを求める遙かなる飛天の旅は続き、命果てるまで美しい世界を描いていきたい。

(吉永邦治 西日本新聞掲載・再構成)

#### 博物館講座のご案内

平成22年5月8日(土) 午後2時～  
「天空へのいざない 飛天・シルクロードを語る」  
吉永 邦治 (大阪大谷大学短期大学部教授)

【申し込み不要、当日会場までお越しください。】

## 世界の博物館・日本の博物館

沖縄県久米島の博物館(2)

文化財学科・教授

中村 浩 (博物館学・考古学)

## ・久米島自然文化センター



市街地から少し山手に久米島自然文化センターがあります。館内では常設展示と特別展示(企画展示)が行われています。後者は期間が限られており、今回は「種子」に関する

展示が行われていました。受付の左側が常設展示の部分であり、右手が特別展示及び図書室のコーナーとなっています。常設展示についてみていくことにしましょう。

まず久米島の自然のコーナーです。久米島の森の様子ジオラマで展示されています。手前にそこに生息する動・植物の写真と解説が見られます。これらの展示でおおよその久米島の自然環境が理解されます。

次に歴史部門の展示です。まずは下地原原人の乳児化石に注目しましょう。展示されている人骨は島の北西部の下地原洞窟から1983年に出土したもので、地名から命名されました。



その年代は15,000から20,000年前と推定されています。幼児一体分の大腿骨や上腕骨などがあり、同一人骨と見られています。

「貝の道」と示されたケースでは、近海から採れる貝を加工して作り出された貝輪などの装飾品を見ることができます。これらの材料となったゴウホラやイモガイという大型巻貝はこの地域の海、南海でしか採れません。そのため貝塚時代と呼ばれる今から2,200年前には、遠く九州地域まで運ばれ弥生時代の遺跡から、これらの製品が出土しています。

このほか東南アジア諸国の土器や陶磁器が交易によってもたらされていたことが、島内各所の遺跡出土品からわかりま



市街地から少し山手に久米島自然文化センターがあります。館内では常設展示と特別展示(企画展示)が行われています。後者は期間が限られており、今回は「種子」に関する



す。歴史関係の展示ではこの島の特産物であった久米島紬に関する史料等も見られます。

グスクと呼ばれる沖縄地域独特の遺跡であるグスクは「城」という文字を当てられて

いますが、この遺跡が各地に盛んに構築された時代のことをグスク時代と呼んでいます。按司と呼ばれる階層の権力者たちが覇を競い合っていた時代の、彼らの拠点であったのです。久米島には現在10ヶ所余りのグスクが知られており、パネルでは6ヶ所が例示されていました。

沖縄は大きく本土と異なる民俗が多く見られます。とくに墳墓の内部に納められる厨子甕が独特です。全体に上半部に美しい立体的な装飾が施されており、内部には骨を収めています。かつての火葬習慣のなかった時代のもので、最近では姿を消しているようです。厨子甕には家屋を模したものが多く、側面や上部の屋根に該当する部分に動植物の文様が施されているものも見られます。表面にグリーンやブルーの釉薬が施されたカラフルなものが多いようです。

このほか耕作に使用された農具やあるいは食物の加工に用いられた様々な民具類が壁面、展示台を問わず窮屈な印象を与えるほど大量に展示されていました。また展示室外側の廊下部分に沿岸漁礁に使用された小船が置かれていました。

ここは、自然と文化の両者を兼ね備えた総合博物館であり、島の概観を知るには最適な施設です。自然文化センターの前方にはグスクの一つがあり、そこに続く階段を登ってみました。ただ広い平坦部に亜熱帯の植物が生い茂っていたのみでした。



## 大阪大谷大学博物館

所在地 富田林市錦織北3丁目11-1 電話 (0721) 24-1039

http://www.osaka-ohtani.ac.jp

交通の便 近鉄長野線「滝谷不動」駅下車西へ徒歩7分

開館時間 午前10時～午後4時

休館日 日曜日および4月29日～5月5日

2010年4月1日発行